

## 緒言

## 民族交流の場としてのヨーロッパ

## Europe as multi-ethnic meeting world

本号には移民関係の論文が3本も集まった。プルーストにおけるジャポニズムを論じたテーレ教授の論文もいれると4本である。ヨーロッパにおける移民問題の広がりを示すものであるが、考えてみればヨーロッパはそもそも多民族の世界であった。スペイン、ポルトガルはかつてムスリムの世界だったし、モンゴル人やフン族は東欧北欧に入り込んでいた。ユダヤ人だって異民族であった。スラヴもやはり異民族。ヨーロッパ内部さえも、ケルト人、ゲルマン人、ローマ人と入り乱れ、ゲルマン人も詳しく見ていけば、フランク、アングロ・サクソン、ゴート、ノルマンとややこしい。そういう多民族が対立したり統合したりしてヨーロッパ世界を築きあげてきたようだ。その統合にキリスト教はきわめて大きな役割を果たしたのであるが、他方で、その歴史は異端断罪の歴史であり、キリスト教自体が分裂し続けてきた。本号はそういうヨーロッパの現実深く切り込むこととなった。

テーレ教授の論文は、この多民族多文化の世界になんと日本文化も参加の資格がありそうだと示している。美術の分野では、ジャポニズムの研究は相当進んでいる。ヨーロッパ近代美術の3分の1くらいは日本美術の影響下に成立したといっても過言ではない。しかし、文学の、しかもプルーストのあの最も有名な一節がジャポニズムだったとは……。日本のプルースト研究者たちはどう考えているだろうか、そう思ったとき、京大教授だった吉田城君がもはやこの世の人でないことの実感の重さにぶちあたった。吉田城君とは大学入学同期で、あるクラブ活動で一緒だった。外国人に英語通訳奉仕をするクラブだったが、わたしは英語の発音をカタカナで覚えていた。吉田君は日比谷のESS出身、父上は英語学者。フランス留学時期も一年重なっている。彼がフランス留学を終える最後の年に、私が留学。毎日BN（フランス国立図書館）に通って、プルーストの草稿と格闘しているという話だった。私も一時BNに通ったが、荘重なつくりで、灯りは手元灯、ここに座っているだけで学問しているという気分になる。わたしがその後アフリカとフランスでうろろしている間に、プルースト研究の世界的権威となっていく。腎臓を患っているという話はかなり以前から漏れ聞いていた。ながい闘病生活だったとおもうが、BNで研究三昧の生活を送れたことは、かれにとって至福の思いではなかつただろうか。そういう幸福感を与える図書館というものもある。

(嶋田記 Shimada)